
クロユリ

狂風師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロユリ

【Nコード】

N6044Q

【作者名】

狂風師

【あらすじ】

あなたは学校から帰るとき、誰と帰りましたか？
友達？彼氏？彼女？一人？またはそれ以外？

主人公は先輩とです。禁断の愛と行為を堪能してください…。

百合の愛（前書き）

あえて18禁にはしませんでした。具体的には描写しないので、これでもセーフじゃないかと。

しかし、危ない行為の描写はソフトに含まれます。

：わざとモザイクかけて表現しますが。

百合の愛

「せーんばい。一緒に帰りましょ」

学校が終わり、下校の時間。

多くの生徒が友達と帰ったり、彼女、彼氏と帰ったり、一人ぼっちで帰る。

でも、私は先輩と。

私は帰宅部で、先輩もまた帰宅部だった。

なぜ帰宅部同士が仲良くなれたかというと・・・。

時は私が入学した時まで遡る。

入学したての私には、どこにどの教室があるのかわからず、

移動教室の時、誤って2年生の教室があるところにいた。

私の学校では用があるもの以外、他学年の廊下に行っではいけないかった。

そんな私を目的の教室まで連れて行ってくれたのが、この先輩である。

その時から私は先輩の事を意識し始めた。

その時に先輩にソノ気があったのかはわからない。

でも、今は違う。

少なくとも友達以上の関係であるのは間違いない。

現にこうして一緒に帰っているのだから。

周りからは何て思われてるだろうか。

友達？親友？カップル？

私としてはもっと上の関係……。そう。それ以上の関係と見られた
い。

当時の先輩もかわいかったけれど、今はさらにかわいい。

無意識に手を伸ばしてしまいたくなるような艶のある腰まで伸び
る黒髪。

私のより少し大きい胸。スリムな体。細くて綺麗な足。

そして、しっかり者でありながらも、どこか抜けているような性
格。

どれを取っても、私の最高のストライクゾーン。

家に帰る方向が同じとあって、電車も同じ。

降りる駅は私の方が一つ前だけど、そこまではずっと一緒。

でも今日は、ある計画を練ってきた。

まずは、いつも通り、普通に家に帰る。それからだ。

家に帰った私は荷物を待った。ネット通販で買った「ある商品」が今日届く。

制服は脱いで普段着に着替える。

さすがに高校生がそれを買ったら危ない。

親は生憎、母親しかない。

父親の方は、私が産まれてすぐに離婚してしまった。

なので顔も憶えていない。

そういう訳で、今は家に一人きり。

母親が帰ってくるのは早くとも夜の10時。

別に嫌いでもないけど、好きでもない。

母親の方だってそう思ってるに違いない。

誕生日だって小学生の時は祝ってもらえたけど、中学に入ったら無くなった。

高校に入ったら、お小遣いまで無くなった。

アルバイトでどうにかしてるけど、大学までいけるお金は無い。

奨学金とか色々あるみたいだけど、それでは無理。

将来、返せないかも知れないから。

それくらい、母親は私の事なんてどうでもいいと思ってる。

小学生の高学年から自分のご飯を作ってた。

思い出すと嫌なことばかりだ。

その時、インターホンが鳴った。

荷物が届いた。

外見の箱からは何が入っているのかはわからない。

私は箱からそれを取り出して、先輩の家へと向かう。

先輩の家へは、電車で一駅分。自転車で行った方が早い。

先輩の家には何度かお邪魔したことがある。

私が先輩と仲良くなれたのは、ただ単に優しくしてもらっただけではないと思っている。

それは、先輩も私と家庭の境遇が似ているということ。

私ほど酷くはないが、先輩もまた父親がいなかった。

先輩の父親は、先輩が小学生の時に病死したらしい。

何の病気かは聞いていないが、今は母親一人でがんばっている。

そんな人間的波長でも引かれたのだと思う。

その波長には、私と同じ一人っ子というのもあると思う。

自転車を走らせ、ほんの10分程で先輩の家に着く。

日は落ちていき、茜色の空は暗くなり始めていた。

この時間なら親はいない。

先輩の家族の事なら大体わかる。それだけ見てきたから。

先輩の親が帰ってくるのは、私が見た中で一番早かったのが夜の8時。

遅くても10時までには帰ってくる。

危険を冒したくは無いので、何としても8時までには作戦を成功させる。

作戦というまでの作戦でもないのだが…。まあ、それは言わないようにしよう。

家のインターホンを鳴らし、先輩を呼ぶ。

優しい先輩。用件は何でもいい。

きっと、いや絶対に中に入れてくれる。

案の定、家の中に入ることに成功した。

この後どうなるかなんて、もちろん先輩は知らない。

リビングで話してしたのを、先輩の部屋まで持っていく。

話の流れさえ作ってしまえば簡単だ。

何度か来た事のある部屋。先輩の良い匂いがする。

丸くて小さな一人用のガラスのテーブルを挟み、向かい合って話す。

しかし、そうゆっくりもしていられないので、計画に移る。

先輩の後ろに回りこんで座る。

そして、お腹の方へと手を回す。

こういう事には耐性がないのか、先輩は随分驚いている。

先輩の熱が伝わってくる。

先輩の背中……。先輩の……。柔らかな肉……。

お腹に回した手を上へと持っていく。

すぐに胸へと辿り着く。

先輩は驚いて多少手足をバタつかせているが、その仕草もかわいい。

胸を優しく揉みつつ、首筋にキスをする。

そして、そのまま前へ。先輩の唇を奪う。

これにはさすがにマズかったのか、先輩が一旦離れる。

当たり前だ。先輩にそんな事をするつもりないのだから。

むしろ、そんな事をされたいと思ってる先輩なんか嫌だ。

2、3歩離れた先輩の前に立ち、持ってきた鞭を出す。

ネット通販で買ったのはこれだ。S Mプレイとかで使うもの。

本当は先輩を傷つけないけど、逃げるのなら仕方ない。

わざと手加減して先輩のお腹を狙う。

肉体的ダメージはほとんど無いものの、精神的ダメージは大きい。

逆らったらどうなるか。これで解らせる。言わば威嚇。

先輩はすっかり怯えきり、小さくなって震えている。カワイイ。

鞭をテーブルの上に置き、再び先輩の胸に手を伸ばす。

もう抵抗は出来ないだろう。

抵抗したら、それはそれで可愛がれるのだからいいのだけど。

今はまだその気は見せない。

なら今のうちに先輩の自由を奪う。

先輩の勉強机の上にあった（ご都合主義でとも言う）セロハンテープで、手を後ろで縛る。

そして、先輩の足自身でベッドへ行かせる。

仰向きになって寝かせる。

鞭を持ち直し、先輩の服の中へ手を入れる。

この感触をどれほど夢に見たことか。

温かと柔らかい感触が伝わってくる。

でも、もちろんこれだけでは満足しない。

服をゆっくり肩まで上げると、先輩の程よい胸が一つの布だけで隠される。

上半身はこれでいいとして、次は…。

そんな私の視線に事を察したのか、足をバタつかせ「やめて！」と大声を出し始めた。

仕方ないけど、鞭で黙らせるしかない。

外傷を作るとバレるので、本当は嫌だったのだけど…。

そういう考慮もあって、服で隠せる部分を狙った。

ちょうど鳩尾のあたり。

ここなら傷が出来ても見つかりにくいし、ダメージも大きい。

鞭で打つのではなく、持つところを使い突く。

2撃目を加えると、さすがに痛いのだろう。悶え始めた。

「せんぱい、ごめんね。でも先輩が悪いんだよ？抵抗なんてするか
ら」

聞こえているかも分からない顔の先輩に言った。

口から僅かに涎を零している。

「せんぱいのよだれ、美味しいですよ」

ほのかに広がる先輩の味。甘くておいしい。

先輩の痛みが落ち着いたところで、スカートを脱がす。

全く抵抗しないわけでもなかったが、邪魔になるほどでもない。

先輩の目からは涙が流れる。

だがそれは、私の心に油を注ぐようなもの。

スカートを脱がし終わると、さっき使っていたセロハンテープで足を縛る。

ここまで来て先輩の目は反抗的な目をしていた。

あれだけの痛みを味わったのに、まだ抵抗する気なのかな？

そして先輩ははっきりとした私への拒絶の言葉を言った。

それは私の意欲を駆り立てる言葉ではなく、逆に働いた。

「来ないで！」 「あんたなんか知らない！ 帰って！」

いつも先輩には優しい私だけど、これには冷静でいられなかった。

ついカッとなった私は、鞭で思い切り先輩の顔を打った。

一度だけではない。二度、三度、四度。

くつきりと赤い線がつき、みみず腫れができる。

唇からは血が滲み出ている。

ある程度打ったところで、熱が冷めて我に返る。

すっかり腫れてしまった先輩の顔。

先ほどの反抗的な目はしておらず、虚ろな目になりかけている。

鞭が手から滑り落ちる。目から熱い涙が自然と流れ出た。

先輩が私のせいで…。

親にバレるという恐怖よりも、先輩が傷ついたことに私も傷ついた。

しかし、全部自分がやったこと。

全身の力が抜けて先輩の上へと倒れこむ。

先輩の上へ泣き崩れる。

先輩は何も言わない。

言わないのか言えないのか、どちらなのか分からない。

けれども私は先輩の上で泣いていた。

罪悪感でいっぱいだった。

だが、私は、ここで、おかしい方向に向かってしまった。

あのまま素直に先輩や親に謝ればよかった。

誤って済む問題じゃないのはわかっている。

でも私はそれをしなかった。

私は、先輩を支配したいという気持ちに傾いていた。

先輩を私だけのモノにすれば、何でも好きなだけ出来る。

そう思った。

先輩は少し元気を取り戻してきて、目もさっきよりはマシになっている。

しかし代わりに、私の目はひどくなっているだろう。

まだ先輩の顔は赤く血が出ているものの、目からははっきりと恐怖が見て取れた。

ああ、いま私はどんな顔をしているのだろう。

一旦、ベッドから降りてあるものを手に取り、再び先輩の上に跨る。

そして手に持った物で先輩の下着を切り取った。

抵抗の素振りを見せようとしたが、刃物を持っている私には抵抗できないのだろう。

素振りだけで抵抗は無いに等しい。

先輩の糸纏わぬ姿。

軽く、優しくお腹を撫でる。

顔では嫌がっているものの、体は正直。

くすぐったいのだろう。体を振じらせている。

さて、これからが本番という所で窓の外の風景が目に入った。

続いて時計を見る。

ようやく暗くなったとはいえ、この季節ではさすがに危ない時間。

早くて8時とは言ったものの、さらに早く帰って来ることだってあるかもしれない。

一番やってはいけないのは、先輩の親にバレる事。

安全第一。本当はもっと先輩とやりたかったけど、仕方がない。

オロナインH軟膏を先輩の顔に塗ってあげ、家に帰る。

続きはまた今度。また今度出来る。

そう自分に言い聞かせながら帰った。

百合の愛（後書き）

本当は連載させるつもりはなかった…。短編で終わらそうかと思っただけど、一旦上げとかなないとサボってしまいそうになるので、一応連載。

続きはどうなるかわからない。

即興で考えたネタ。どこまで続くか…。もしかしたら連載打ち切りにもなるかも。

評判がよければ書きます。特になければ…。どうなるかわからない…。

狂気の愛（前書き）

ちょっと短いけど、とりあえず更新。
そしてもうネタがない…。

狂気の愛

家に帰った私は、さらに悪い事を思い出した。

そう。先輩の家に鞭を置いてきたこと。

いくら先輩が優しいといえ、これを証拠に出さないとは言えない。

私が行為を行った唯一の証拠。

今から先輩の家に戻る？

いや、いま先輩にあつたら私は何をするかわからない。

親と鉢合わせるかも知れない。

先輩を信じて今日は何も出来ない。

翌日。

学校で先輩とすれ違った。先輩の顔は、まだ赤く腫れていた。しかし、どうも避けられている。

どうして？ どうして避けるの？

先輩が他の人たちと喋ってるの見てるの、ツライよ？

そんな先輩の姿、見たくないよ。

じゃあ見ないためにはどうしたらいい？

そうだ。先輩と関わる人を殺しちゃえばいいんだ。

そうすれば、先輩とずっと一緒にいられるし、先輩を私だけのものにできる。

じゃあどうやって殺す？

先輩と関わっている人は、多くはないものの決して少なくない。

一人ずつ殺していたんじゃ、すぐ捕まる。殺るなら、バレずに且つ一度に殺らなければならない。

ではどうしたらいいか。

そんなことを考えて、今日の授業は終わった。

いつもみたいに先輩を校門で待つ。しかし、どれだけたって先輩は現れなかった。

満を持して上級生の使う下駄箱に行ってみる。

すると、やはり先輩の靴はなかった。

つまり、もう帰ったって事。

…私を置いて帰るなんて…。いつもの先輩じゃない…。

そうか…先輩はアイツらと関わってるから、きっと毒されてるんだ。

じゃあ毒を抜くにはどうしたらいい？

私が全部吸い出してあげればいいんだ。

待っててね、先輩。私が助けてあげるからね。苦しいでしょ、先輩。苦しいよね、先輩。

大丈夫だよ。全て私に任せてればいいんだよ。

土曜日。

今日も母親はいない。仕事だと言う。実際、分かったもんじゃないが、別に私にはどうでもいい。

ついに、実行する。毒されてる先輩を元に戻してあげる日。

アイツらを殺すのはそれからでも遅くない。また毒されたら、また抜いてあげるだけ。

さっそく先輩の家に向かう。ある程度、必要だと思われる道具を持って。

先輩の家。

インターホンを鳴らすと、先輩ではない声が聞こえた。母親だ。いないとは思ってなかったけど、私のする事に支障が出る。

駆除しておくべき存在……。先輩には悪いけど、邪魔なものは邪魔。

玄関の扉が開くと、やはり先輩ではなく母親が出てきた。

家の中に入って扉が閉められる。

それと同時に、持ってきた包丁で喉元を突き刺す。

激痛で叫ぼうとするが「ひゅー、ひゅー」と空気が漏れるだけ。

夥しい量の血が流れ出て、床一面に赤い池が出来る。包丁を持つ手が震える。

母親が力なく倒れていく。全身が恐怖に支配され、体が震える。

異変に気付いた先輩が階段を下りてくる音が聞こえる。

ここで騒がれるわけにはいかない。階段へと急ぎ、ちょうど降りてきた先輩に包丁を突きつけ、口を塞ぐ。

もちろん、私の唇で。

包丁による脅しと口を塞がれた先輩を、2階の部屋へとエスコートする。

前にも来た先輩の部屋。またここで…しかし、今度はきちんとした目的がある。

先輩をベッドへに倒す。そして再び唇を奪う。ベッドにはさっきの返り血で、赤いシミが出来る。

甘くて、蕩けるような液体が口の中で混ぜ合わさる。

先輩は歯で閉ざしているが、それもまた良い。ゆっくり、ゆっくり、私のモノにしたらしいのだから。

いつか自分からキスを求めてくるような、そんな体にしてしまえばいい。

部屋には淫らな水音が響き渡る。

一度、口を離すと、手に持つ包丁で先輩の服を、先輩の肌をなるべく傷つけないように引き裂く。

スカートも同じ要領で引き裂いていく。

いつ見ても綺麗な先輩の肌。顔の方はまだ若干みみず腫れが見れるが、特には気にならないほど。

お腹を傷つかないように、包丁の背で撫でる。

まだ冷たい包丁。先輩のお腹を血で染めていく。

私の血を見て、大体何が起こったのかを察したのか、涙目になっていく。

しかしあの時みたいに、私に反抗する目をしている。

その目は、余計に私の心の何かを刺激する。

そうだ。毒されてるんだった。

私は何してるんだろう。はやく先輩を助けてあげないといけないんだった。

「ねえ、先輩。毒されてる体から毒を抜くには、どうしたらいいと思う？」

反抗的だった目が、恐怖の色へと変わる。その目はその目で私をさらに刺激する。

包丁を持ち直し、先端で優しく先輩のお腹を撫でる。

そのまま腕まで包丁を持っていき、軽く突き刺す。

血が滲み出ると、先輩の顔が痛みに歪む。

さらに追い討ちをかけるように、言う。

先輩の瞳孔が余計に開いた気がした。

「もう誰も助けてくれないよ。お母さんは下で死んでるからね」

狂気の愛（後書き）

最後の方は、なんかテキトーになってしまった…。反省している。
でもネタがなかったんですもん！ 書けなかったんですもん！

ああ…クジケソウ…。

不滅の愛（前書き）

ここからが本編です。

…たぶん。

不滅の愛

十数年後。

先輩も家も母親も社会的地位も、何もかも失った。

人を一人殺して十数年で出てこれるのだから、そこは感謝すべきなのかも知れない。

当時、まだ16才だった頃、今もあの時の記憶が脳に焼きついて
いる。

風の噂によると、先輩は親戚に預けられたよう。

それも対人恐怖症に陥ったとか。

今の私には、先輩に見せる顔がない。大好きな先輩に、強い精神的ダメージを与えてしまった。

後悔と反省とが渦を巻いて、私の心を蝕んでいく。

もういつそのこと死んでしまおう。そうすれば楽になれる。

先輩。先に行って待ってますね。

『さようなら』なんて言いたくないけど…。

「さようなら」

…そんな度胸もなかった。愛する人のために死ぬ事すらできない。

私には何も残ってないのに、それでも怖気づいてしまう。

じゃあどうしたらいいの？

私を全部失ったのに、これ以上どうしろって言うの？

……。

「そっか。最初から答えは一つしかないんだ」

頭の中に、黒い塊が生まれたような感じがした。

その塊は理性を覆い、あっという間に頭の中全体に広がる。

おもむろに足を動かす。目を閉じてもわかる、あの場所目指して。

行ったところで何もないのは分かりきっている。

そんなことくらい、黒い塊でも分かる。

近くの駅から1駅。懐かしい空気。

雰囲気はある程度変わっているが、それでもわかった。

ここで私は…。

と、感傷に浸っているときに、一人の男性が声を掛けてきた。

いかにも草食系男子と言うような、中の上くらいの男性。

ここら辺の人ではない。と言うか日本人でもなかった。

とても片言な日本語で、病院の場所を知りたいと言う。

言葉で案内してみるが、どうにも伝わってない。

仕方なく病院まで一緒に行く羽目に。

一番近くの病院へと案内する。しかし、なぜ病院なのだろうか？

観光名所ならわかるが、外人が日本の病院に、それも知らない病院に行く意味があるのだろうか？

ここ近所に引っ越してきたばかりで、病院の場所がわからない。

そういう事しておいた。聞いても、あの日本語じゃこっちが疲れる。

近くの病院へと到着。

そういえば、ここの病院には精神神経科があるんだっけ。

少しの期待と、たくさんの後悔。

後ろを振り向き、『着きました』と言おうと思った。

しかし、そこには誰もいない。

さっきまでの外国人は煙のごとく、跡形もなく消えていた。

白昼夢でも見てるよう。さっきまで確かにいたはず。いたはずなのに。

膝が震え、まともに立ってられない。本当に驚いたときは、人間、何も言葉が出ない。

不意に病院の自動ドアが開いた。

中から出てきた人を見ると同時に、私の瞳孔も開いた。

震えてる足で、その場を走り去る。何度も、何度も転びそうになるけど、それでも走る。

「そんな…そんなはずない…。だって…親戚に預けられたって…！」
若干大きな声でそう呟く。

どこまで来ただろうか。

限界に近い体に鞭打って、目的も何も決めず、ただ走ってきた。

日は傾き、空に朱色を混ぜ始める。

心臓は、走ったせいで、さっきの出来事で破裂しそうなくらい脈打つ。

いつそのこと、このまま破裂してしまえばいいのに。

人間の体はそう脆くない。

随分と走った気がした。ここはどこだろう。

痛いぐらいの心臓を無視して、自分のいる場所を確認する。

が、実際はそこまで遠くまで来たわけじゃなかった。

見慣れた土地。こんなにも心臓は痛いのに。

…私はなんで逃げたんだろう？

せっかく先輩に会えたのに、なんで逃げたんだろう？

冷静になっての自問自答。答えは出た。

走ってきた道を、歩いて戻る。

先輩は対人恐怖症。あくまでも噂だけど、今は信じるしかない。

なら、先輩は親戚に預けられたんじゃない。入院してるんだ。

前も言ったように、あの病院には精神神経科がある。

少しではあるが、入院できるようにもなっている。

病院へ戻る道で『先輩に会いたい』という気持ちと『会ってどうする』という気持ちがせめぎ合う。

私は先輩にあって、何をするのだろうか？ また、あんな事をしてしまうのだろうか？

…考えてもしょうがない。いや、考えるまでもない。

何をしたいじゃない。会いたい。それだけだ。

おかしいかもしれないが、自分で自分の心がわからない。

それでも、先輩に会いたい。その心は、はっきりとわかる。

辿り着いた病院。もちろんの事、先輩の姿は無い。

緊張した足で、しかし、しっかりとした足取りで中へ入っていく。

ここが先輩のいる病室。

やっぱり私の思ったとおり。先輩は入院していた。

今、病室の扉を…開ける。例え、先輩に何を言われようが、気にしない。

私は今から、先輩を、『救う』のだから。

不滅の愛（後書き）

250行で更新とか言っておきながら、実際は210行。

いや、キリが良かったからです。それと、早く読者さんに読んでもらいたかったからです。

ホントデスヨ？

絶望の愛（前書き）

短いですが、勘弁してください…。
ネタがないんです…。

絶望の愛

病室に入ると、目の前に広がるのはカーテン。

私の心を焦らしているのだろうか。

やや乱雑にそれを開けると、怯えた表情でこちらを見ている人があつた。

ああ、先輩……。変わってない。

ゆつくりと、確実に近寄っていく。

ベッドに寝ていた先輩は、とっさに起き上がることも出来ずに、それでも私と距離をとろうとする。

だが、向こうには武器が隠されていた。

それに気が付いたときには、先輩はその武器を手に使っていた。

早く武器を何とかしないと、大変なことになる。

先輩には悪いが、それを押させるわけにはいかない。

今は絶対に人に来て欲しくない。

ゆつくりだった足を駆け足へと変え、それを押される前に奪うことに成功した。

代償としては、多少ではあるが先輩に暴力を振るってしまった。

しかし、まだ先輩の抵抗は続く。

人間のものとは思えない声で、喚く叫ぶ。

急いで、口を塞ぐ。

指に痛みを感じる。先輩が噛み付いてきた。

痛い、けど痛くない。先輩が噛むというのは、私にとってご褒美みたいなもの。

なおも噛み続ける先輩。

いい加減に噛み技も飽きてきた。そろそろ次の工程に入ってもいいだろう。

口を押さえている指を、自分から先輩の口の中に突っ込む。

驚いて噛む力を緩める。しかし、私が指を動かしているためなかなか噛めない。

先輩の口の中。温かくて、ぬるぬるで。歯茎から喉の方まで掻き回す。

にちゃにちゃという音が病室内に響く。

指を離すと、白い銀色の糸が延びる。

すぐさまもう片方の手で口を押さえる。

強く、強く、言葉を出せないくらい強く。

私の、私の、何年もの想いを先輩に。

先輩に。

…せんぱい？　なんで急に静かになっちゃうんです？

ねえ、せんぱい？　聞いてます？

どうして目を見開いたまま、息をしないんです？

ああ、そっか。私が口を塞いでるからか。

せんぱい。手、どけましたよ？　叫んでもいいんですよ？

…。

……。

窓を開けると、気持ちのいい風が吹いていた。

日の光が心地よく、流れる雲は穏やかだった。

ちょっとしただけのベランダとも言えないベランダ。

ぐったりした先輩をベッドから運ぶのは、僅か2，3メートルでも大変だった。

白いペンキで塗られた手すりは、ところどころ錆付いている。

一度、先輩を下におき、体勢を直す。

ここは3階。

それでも、見下ろす地面はちっぽけで、底が見えないようにも見えた。

目眩がする。真っ赤なメリーゴーランドに回され、吐き気がするような。

先輩を抱く腕に力を増し、離れられないようにする。

「せんぱい…ごめんなさい」

絶望の愛（後書き）

はい完結。誰が何と言おうとこれで完結。

ネタと書く気が、まったく無かったので完結です。

最後はなんだか意味不明でドタバタしてしまいましたが、ネタが無いのがいけないのです。

あくまでも『即興』小説ですから。

ちなみに、ちょこっただけボカロ曲の歌詞を使わせてもらいました。

主人公と先輩がどうなったのかは、読んでる人に任せます。

それぞれがそれぞれのエンディングを想像できたらいいな、と。

これまでのご愛読、ありがとうございました。

作者「（ふう、やっとこれで新小説が書ける…）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6044q/>

クロユリ

2011年10月7日02時00分発行